

筑摩川

長唄 全詞章

原典に「杵屋林鸞述」とあるのみ

作詞者・初演年不詳

夫れ木曾山の南面に、落合ふ水の筑摩川

頃しも秋の習にて、続く霖雨もやや晴れて、雨後の川水弥まさり

名にし大井の満水も、かくやと思ふ川の面、矢よりも早き急流は、目ざましくも亦恐ろしき

扱も我慢の大領が、臣下の諫小賢しと、水馬のためし魁の、名馬に策をあて給ふ

様子得たりと又助が、忍ぶ蘆原押分けて、立出る影もきらめきし、刃の光鋭くも、ざんぶと

川へ入る間もなく

君の勇気に劣らじと、警固の臣が馬面をそろへ、乗入る大河遠浅を

上手の方へ半町あまり、登るとすれば水勢の、力に押れ一同に、戻りては又大石の助によりて

踏みとどまり

渡る人馬も戦場の、修羅の巷に異ならず

危うかりける、勇ましかりける次第なり